京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成26年10月16日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長　辻　井　昭　雄　様

所属部局　文学研究科

職　　名　教授

氏　　名　小林致広

助成の種類	**平成26年度　・　研究成果公開支援　・　国際会議開催助成**	
事業内容	アジア太平洋州ラテンアメリカ研究協議会第6回京都大会	
開催期間	平成26年 9月16日　～　平成26年 9月18日	
開催場所	京都大学文学部校舎	
参加者	総数 101名	内訳 国内参加者52名、海外からの参加者49名
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☑ 無　☐ 有(　　)	
会計報告	事業に要した経費総額	1,962,273　円
	うち当財団からの助成額	1,000,000　円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 地域研究統合情報センター、科学研究費補助金

経費の内訳と助成金の使途について

費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
招聘交通費	1,238,290	577,920
大会ウエブページ構築費	343,320	333,060
プログラム印刷代	45,360	45,360
看板代	58,320	38,880
文具	121,983	4,780
アルバイト謝金	155,000	0
計	1,962,273	1,000,000

当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 予算項目の変更にも応じていただき、ありがとうございました。

成果の概要／小林致広

9 月 16 日（火）～18 日（木）の 3 日間にわたり、京都大学文学部校舎において、アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会（Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía-CELAO）の第 6 回研究大会（京都）を開催した。とくに問題もなく、無事に全日程を終了することができた。関係者一同を代表し、ご支援いただいたことに対し、あつくお礼を申し上げる。

今大会は、「ラテンアメリカの伝統と現代性を再考する」（"Rethinking the Tradition and Modernity in Latin America"; "Tradición y modernidad en América Latina: perspectivas y reconsideraciones"; "Tradição e modernidade na América Latina: perspectivas e reconsiderações"）をメインテーマとした。

21 世紀最初の 10 年を経て、「アメリカ合衆国の裏庭」と揶揄されてきたラテンアメリカ地域も、地域内の多様性が顕著となってきている。例えば、前世紀終盤、ラテンアメリカは発展途上地域では最も早く、新自由主義革命の洗礼を受けた。アメリカ合衆国の覇権の最盛期とも重なり、民主主義と自由が基調となる均質な地域になる傾向が見られた。だが、前世紀末になると、一層拡大した格差や未解消の貧困などの経済社会問題を背景に、新自由主義路線への批判が強まり始める。そして、今世紀に入り、アメリカ合衆国の覇権の低下とも重なり、ラテンアメリカ諸国は、新自由主義路線を堅持するグループと、同路線を批判する左派が強力となるグループに分かれた。さらに後者は、新自由主義を拒否する急進派グループと、マクロ経済レベルでは新自由主義を維持するものの社会政策の充実を掲げる穏健派グループとに分かれた。

今大会のメインテーマは、前述のようなラテンアメリカの最近の展開と現状を踏まえつつ、過去に取り組まれてきた議論や研究を改めて見直し、新たな視点や歴史的な視点について再考し、深化させることをねらったものである。同時に、アジア太平洋の研究者が集う機会であることから、アジアとの比較や関係性についての考察も行うことを目的とした。手前味噌になって恐縮であるが、今回の大会の様々な発表は、メインテーマの目的を十分に達したものと評価している。

今大会は、開会式のほか、2 つの基調講演、9 つのパネル（発表総数 33 件）、13 の分科会（発表総数 39 件）をプログラムとして組んだ。パネル、分科会は、文学、言語、歴史、文化、政治、経済、社会、国際関係、環境など、多様な分野におよんだ。

参加者は 101 名だった。CELAO の過去の大会の参加者は、多い場合でも 50 名程度であったことから、今大会はほぼ倍の参加者となった。そのうちの 49 名は外国からの参加者だった。オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、イスラエル、韓国、メキシコなどから来た研究者であった。過去 2 回の大会の傾向でもあったが、今回も、メキシコからの参加者が、海外からの参加者の過半数以上を占めた。また、日本からも、大学院生を含め、多数のラテンアメリカ研究者が参加した。

最初の基調講演は、「ラテンアメリカと日本の間の新たな動態的関係に向けて」と題し、JICA 研究所の細野昭雄氏が行った。この中で同氏は、東アジアでは「雁行型発展」のダイナミズムが自然に形作られたのに対し、ラテンアメリカでは同様の有機的な地域統合が観察されない点を指摘し、ラテンアメリカに対する日本の新たな協力の可能性を指摘した。2 つ目の基調講演

は、スペイン・サラマンカ大学のマヌエル・アラカンタラ教授による「21 世紀の政治課題に対するラテンアメリカの回答」であった。同教授は、過去 30 年ほどにわたり、ラテンアメリカでは民主主義が維持されてきているものの、今世紀に入り、急進左派政権が誕生した国を中心に民主主義の劣化が見られること、また、一般犯罪の増加といった、前世紀のラテンアメリカが直面した課題とは異なる課題が重要性を増しており、そうしたことからも民主的な統治能力の低下が課題となっていることを提起した。

こうした基調講演を受け、関連したテーマや課題をより深く議論したパネルや分科会が見受けられた。最初のラテンアメリカと日本などのアジアとの関係・比較については、パネル「ラテンアメリカの新たな地域統合とアジア」やパネル「メキシコと日本の社会的経験と協力」、分科会「ラテンアメリカとアジアの現在」などがあった。また、二つ目の政治関係では、分科会「ラテンアメリカの比較政治動態」やパネル「ラテンアメリカの地方政治」、パネル「アジアの民主主義と社会資本」などであった。

他方、パネルや分科会の間でも、有機的な連関性が見られた。例えば、歴史・文化関係で、パネル「植民地期と現代のメキシコの先住民の起源と正統性をめぐる過去の再構築」と分科会「エスニック、人種、文化」、あるいはパネル「サパティスタ自治地方組織の構築」と分科会「メキシコの農村社会」などがあった。

そうした連関性は好意的に受け止められたようで、少なからぬ参加者から、きわめて充実した内容の大会であった旨の感想が寄せられた。

次回は、2016 年に、ニュージーランドで開催する予定である。